

接触場面での日本人韓国語学習者の呼称使用ストラテジーと それに対する韓国人母語話者の容認性判断

Usage of address-terms by Japanese Korean-Language-Learners and the
appropriateness of decisions by Native Korean Speakers in Contact Situations

林 炫情

LIM Hyunjung

Abstract

This research investigates the strategy of address-terms used by Japanese Korean-language-learners in contact situations, and how Korean native speakers accept those usages. 1) The investigation of the usage of address-terms by Japanese Korean-language-learners found out that in the contact situations with non-native speakers, not only native norms transfer and deviation of norms were seen, but also learners tend to use the address-terms too much in order to show the politeness. 2) Korean native speakers accept the native norms transfer, deviation of norms and over usage after judging the appropriateness by standardizing own native norms. In addition, 3) Korean native speakers tend to be generous overall about the overuse.

キーワード：接触場面、呼称使用、日本人韓国語学習者、容認性判断、韓国人母語話者

Key words : Contact Situations, Usage of address-terms, Japanese Korean-language-learners, Appropriateness decisions, Native Korean speakers

1. 研究の目的

言語や文化背景が異なる者同士の接触場面では、さまざまな言語的、社会文化的な問題に直面することが多い。接触場面でより効果的なコミュニケーションをはかるために、非母語話者と母語話者が用いるさまざまな方略を外国語教育、第二言語習得の研究分野ではコミュニケーション・ストラテジー (Communication Strategy: CS) という。

従来、第二言語習得研究における中間言語研究では、学習者は母語話者の運用規範を「学習」「習得」することが期待され、非母語話者が使用することばを母語話者のそれと照らして、誤用を母語話者の域に達する過程として捉えるものが多い (Faerch & Kasper, 1983)。また、中間言語での語用論的転移は、特定の言語行為が行われる際の言語形式と機能のマッピングやストラテジーの選択に表れる (清水, 2009) ことが多いとされるが、そのうち母語の影響がプラスに出る場合を「正の転移」、その逆を「負の転移」と

いう。特に、語用論的な負の転移について Kasper & Blumkulka (1993) は、負の転移は必ずしも目標言語 (Target Language: TL) の語用論的知識の欠落や語用論的特徴の普遍性の認識を反映しているわけではなく、TL文化への社会文化的な順応の程度も語用論的スタイルの選択にかかわっているとしている。つまり、学習者によってはそもそもTL母語話者の基準を目標にしないことも考えられる。

一方、言語管理理論では、規範 (norms) を個人のインターアクションを方向づける基盤となるものとしてとらえる (薄井, 2007)。特に、文化管理 (cultural management) の観点から日本語母語話者と日本語非母語話者が文化的逸脱をどのように管理しているかを調査したフェアフラザー (2002) では、非母語話者 (NNS) は自分の母語規範とは異なる規範、接触場面規範をもっていること、母語話者 (NS) は必ずしも共通の規範をもっているわけではなく、とりわけ強い否定的評価は言語的逸脱に対しては見られず文化的

(社会言語的、社会文化的)逸脱に対してのみ見られることを報告している。

さらに、ファン(2006)は、日本語の相手言語接触場面におけるコミュニケーションを分析した結果として、言語ホストであるNSは「接触言語のオーソリティー」となり、会話を維持し相互理解を確立するために、語彙の簡略化、発話の減速化、話題の提供などでNNSの言語問題を調整し、会話をコントロールする傾向があるとしている。これに対し、言語ゲストであるNNSは、参加の回避や言語ホストに支援を求めるなどの達成ストラテジーを使用しながら、自らの言語問題を調整すると述べている。つまり、何がその言語行動において適切で有り、何が許容範囲にあるか、また相手の意図と行動をどのように解釈すべきかなどは、接触場面における参加者や用いられる言語によって異なる可能性があるといえる。

本研究では、接触場面での日本人韓国語学習者による呼称使用ストラテジーの実態を調査し、呼称使用ストラテジーにおける母語規範の転移や目標言語規範の逸脱、相手言語規範にそった呼称使用を、韓国人母語話者による容認性判断という観点から検討する。なお、本稿では呼称使用ストラテジーを、日本人韓国語の学習者が韓国人母語話者と有効な関係を維持するために使用する呼称と広範な意味として用いる。

2. 日本語と韓国語における呼称の使い分け

日本語母語話者と韓国語母語話者における呼称の使い分けの特徴を先行研究の調査結果をもとにまとめると次のことがいえる。まず第1に、韓国語や日本語では、自分や相手、そして話題の人物に言及する場合、発話者と聞き手、話題の人物との社会的関係、性別、場面などの違いによって、人称代名詞、地位・役職名、職業・役割名、親族名称、個人名、敬称など、多彩なバリエーションから呼称が選択される。また、これらの呼称ごとに、待遇度が異なる様々な表現形式も存在する(林, 2001a; 林, 2001b; 林, 2002; 林・深見, 2004)。

第2に、韓国語では目上に対しては親族名称が、同年輩、年下に対しては実名で呼びかけるのが一般的である。これに対し日本語では、同僚や知人においてごくわずかな親族名称だけが用いられているだけで、非親族に対しては名前でも相手のことをとらえることが圧倒的に多い(林, 2001a; 林, 2001b; 林, 2002; 林・深見, 2004)。

第3に、日本人と韓国人のウチ(身内、ごく親しい人)・ソト(親しくないが既知の人)・ヨソ(初対面

の見知らぬ人)の意識には多少のズレがみられる。また、同じ場面であっても相手に対する心配りの仕方はそれぞれ異なることから、その使い分けにおいては違いが存在する(林・玉岡・深見, 2002; 林, 2003; 林・玉岡, 2003; 林・玉岡, 2004; 林・深見, 2004; 林, 2005; 林, 2006)。

第4に、日本語と韓国語の呼称選択には、発話場面の負担の度合いに関係なく、親疎のような相手との「社会的距離」と目上目下のような相手との相対的「力関係」の要因が、両言語の呼称選択の丁寧度に強く影響する。しかし、その使い分けにおいては、日本語では相手との上下関係よりも親しいか親しくないかという親疎関係(相対的使い分け)が優先される。これに対し韓国語では、相手との年齢の上下関係(絶対的使い分け)がより優先される(林・玉岡・宮岡・金, 2010; Tamaoka & Lim, et al., 2010)。

第5に、日本人大学生は、先輩に対しては実名を用いるのが一般的で、親族名称を用いることは適切でないと判断する傾向があるのに対し、韓国人大学生は、上下関係や発話の内容に関係なく、全体的に先輩に対しては親族名称を用いるのが一般的である。そして、「親族名称」使用は相手との距離を縮めるための呼称として、「実名」はフォーマルな場面で相手と距離をおくための呼称として用いられる傾向が強い(林・玉岡, 2009)。

以下では、接触場面での日本人韓国語学習者の呼称使用に焦点をあて、親疎関係の異なる年上、同年齢、年下の韓国人に対して学習者がそれぞれをどのように呼んでいるかに関する実態調査をもとに概観する。また、日本人母語話者の呼称使用のストラテジーに対して韓国人母語話者はどのように受け止めているかを検討する。

3. 「日本人韓国語学習者の呼称使用ストラテジー」に関する調査概要

2014年5月から6月にかけて、山口県内の大学で韓国語を第二言語として学習する中・上級の日本人大学生28名を対象に、韓国人との接触場面での呼称使用ストラテジーに関する質問紙調査を行った。質問紙では年齢の上下関係・親疎関係・性別の異なる18種類の対人関係を想定し、良好な人間関係を構築しながらコミュニケーションを達成していこうという場合に、それぞれの相手に対してどのような呼称語を用いるのかについて、自由記入式による複数回答を求めた。具体的には、3(年上・同年齢・年下)×3(親しい・親しく

ない・初対面) × 2 (同性・異性) の合計18種類の間 年齢、年下に分けてまとめると、表1 (年上)、表2
柄である。日本人韓国語学習者の呼称使用を年上、同 (同年齢)、表3 (年下) のようになる。また、図1

表1. 日本人韓国語学習者の年上に対する呼称使用

相手		語形	回答数	%		
年上	親しい同性	親族名称	姓名+eonni	1	2.9	89.3
			名+eonni/hyeong	17	48.6	
			eonni/hyeong	14	40	
		名前	名+ちゃん	2	5.7	10.7
			名+呼び捨て	1	2.9	
		合計	35	100.0		
	親しい異性	親族名称	姓名+oppa	1	3.1	90.6
			名+oppa/nuna	16	50.0	
			oppa/nuna	12	37.5	
		名前	名+呼び捨て	2	6.3	6.3
		その他	呼ばない	1	3.1	3.1
		合計	32	100.0		
	親しくない同性	親族名称	名+eonni/hyeong	6	18.2	33.4
			eonni/hyeong	5	15.2	
		名前	姓名+ssi	2	6.1	63.6
			姓+ssi	1	3.0	
			名+ssi	11	33.3	
			姓+さん	2	6.1	
			名+さん	5	15.2	
		その他	呼ばない	1	3.0	3.0
		合計	33	100.0		
	親しくない異性	親族名称	名+oppa/nuna	3	9.4	18.8
			oppa/nuna	3	9.4	
		名前	姓名+ssi	3	9.4	71.8
		名+ssi	11	34.4		
		姓+さん	1	3.1		
		名+さん	6	18.8		
		姓名+呼び捨て	1	3.1		
		名+呼び捨て	1	3.1		
その他		呼ばない	3	9.4	9.4	
	合計	32	100.0			
初対面の同性	親族名称	名+eonni/hyeong	2	6.2	25.0	
		eonni/hyeong	6	18.8		
	名前	姓名+ssi	2	6.2	75.0	
		名+ssi	10	31.3		
		姓名+さん	2	6.3		
		名+さん	7	21.9		
		名+呼び捨て	2	6.2		
その他	呼ばない	1	3.1	3.0		
	合計	32	100.0			
初対面の異性	親族名称	名+oppa	1	3.2	19.3	
		oppa/nuna	5	16.1		
	名前	姓名+ssi	6	19.4	70.9	
		姓+ssi	1	3.2		
		名+ssi	9	29.0		
		姓+さん	1	3.2		
		名+さん	5	16.1		
	その他	呼ばない	3	9.7	9.7	
	合計	31	100.0			

注. n=28. 複数回答あり

表2. 日本人韓国語学習者の同年齢に対する呼称使用

相手		語形	回答数	%			
同年齢	親しい同性	名前	姓名+a/ya/i	1	2.9	88.5	
			名+a/ya/i	9	25.7		
			名+ちゃん	2	5.7		
			名+呼び捨て	19	54.3		
		その他	名+eonni	1	2.9	11.5	
			ニックネーム	2	5.7		
			呼ばない	1	2.9		
		合計			35	100.0	
		親しい異性	名前	名+a/ya/i	5	14.7	91.2
				名+くん	2	5.9	
	姓名+呼び捨て			2	5.9		
	名+呼び捨て			22	64.7		
	その他		ニックネーム	3	8.8	8.8	
	合計				100.0		
	親しくない同性	名前	姓名+ssi	1	3.3	90.0	
			名+ssi	9	30.0		
			名+a/ya/i	2	6.7		
			姓名+さん	1	3.3		
			名+さん	2	6.7		
			姓+ちゃん	1	3.3		
名+ちゃん			5	16.7			
名+呼び捨て			6	20.0			
その他		ニックネーム	1	3.3	10.0		
		呼ばない	2	6.7			
合計			30	100.0			
親しくない異性	名前	名+ssi	10	33.3	86.7		
		姓名+さん	1	3.3			
		名+さん	3	10.0			
		名+くん	3	10.0			
		名+呼び捨て	9	30.0			
	その他	呼ばない	4	13.3	13.3		
合計			30	100.0			
初対面の同性	名前	姓名+ssi	1	3.1	90.6		
		名+ssi	10	31.3			
		名+a/ya/i	1	3.1			
		名+さん	3	9.4			
		名+ちゃん	4	12.5			
		名+くん	2	6.3			
		名+呼び捨て	8	25.0			
	その他	呼ばない	3	9.4	9.4		
合計			32	100.0			
初対面の異性	名前	姓名+ssi	2	6.9	86.2		
		名+ssi	9	31.0			
		名+さん	4	13.8			
		名+くん	2	6.9			
		名+呼び捨て	8	27.6			
	その他	呼ばない	4	13.8	13.8		
合計			29	100.0			

注. n=28. 複数回答あり

表3. 日本人韓国語学習者の年下に対する呼称使用

相手		語形	回答数	%			
年下	親しい同性	名前	姓名+a/ya/i	1	3.1	93.8	
			名+a/ya/i	8	25.0		
			名+ちゃん	1	3.1		
			名+呼び捨て	20	62.5		
		その他	ニックネーム	1	3.1		6.2
			呼ばない	1	3.1		
		合計	32	100.0			
	親しい異性	名前	姓名+ssi	1	3.2	93.6	
			名+ssi	2	6.5		
			名+a/ya/i	5	16.1		
			名+さん	1	3.2		
			名+くん	2	6.5		
			名+呼び捨て	18	58.1		
	その他	ニックネーム	1	3.2	6.4		
		呼ばない	1	3.2			
		合計	31	100.0			
	親しくない同性	名前	姓名+ssi	1	3.3	86.7	
			名+ssi	5	16.7		
			名+a/ya/i	4	13.3		
			名+さん	1	3.3		
		姓名+さん	1	3.3			
		姓+ちゃん	1	3.3			
		名+ちゃん	5	16.7			
		名+くん	1	3.3			
		名+呼び捨て	7	23.3			
その他		呼ばない	4	13.3	13.3		
	合計	30	100.0				
親しくない異性	名前	姓名+ssi	1	3.3	86.7		
		名+ssi	6	20.0			
		名+a/ya/i	1	3.3			
		姓+さん	1	3.3			
		名+さん	1	3.3			
		姓+ちゃん	1	3.3			
		姓+くん	1	3.3			
		名+くん	3	10.0			
		名+呼び捨て	11	36.7			
	その他	呼ばない	4	13.3		13.3	
	合計	30	100.0				
初対面の同性	名前	姓名+ssi	1	3.2	84.0		
		名+ssi	6	19.4			
		名+a/ya/i	3	9.7			
		名+さん	2	6.5			
		名+ちゃん	6	19.4			
		名+くん	1	3.2			
		名+呼び捨て	7	22.6			
	その他	呼ばない	5	16.1		16.0	
	合計	31	100.0				
初対面の異性	名前	姓名+ssi	2	6.5	87.1		
		名+ssi	9	29.0			
		名+さん	2	6.5			
		名+くん	7	22.6			
		名+呼び捨て	7	22.6			
	その他	呼ばない	4	12.9		12.9	
	合計	31	100.0				

注. n=28. 複数回答あり

は呼称使用の語形別出現頻度、図2は名前使用の類型を目標言語（韓国語）呼称使用と母語言語（日本語）呼称使用別に示したものである。

日本人韓国語学習者の呼称使用を調べた結果、年上に対しては、「親族名称」、「名前」が呼称として用いられ、その中でも親しい間柄に対しては「親族名称」、その他の間柄に対しては「名前」が多用されている。これは韓国人母語話者間の呼称使用パターンと全体的に類似しているといえる。日本語では非親族の相手に対して親族名称で呼ぶことは一般的でない。しかし、韓国語では「親族名称」使用は相手との距離を縮めるための手段として用いられることが多い（林・玉岡, 2009）。本調査において日本人韓国語学習者が年上の韓国人、特に親しい相手への心配りを示す親族名称が多用されている背景には、相手と友好な関係をより深めていきたいという学習者のストラテジーがうかがえる。また、親族名称の使用は親しい間柄を除き、すべての場面において異性よりも同性に対して比較的多用されていることから、相手が同性か異性かがその使用に影響を及ぼしていることが明らかになった。

一方、同年齢や年下に対しては、相手を「名前」で

呼ぶケースが一般的であった。これも年上同様に韓国人母語話者間の呼称使用パターンと全体的に類似している結果である。名前の使用において注目すべき点は、両言語の呼称語形が混在している点である。しかし、図2に示したように、全体的には母語言語（日本語）呼称よりは目標言語（韓国語）呼称を用いるのが多かった。具体的にみると、韓国語の呼称語形としては、出現頻度は親疎関係や相手との性差によって多少違いがあるものの、年上に対しては「名前（姓名/姓/名）」に「ssi」をつけるパターンが、同年齢と年下に対しては「名前（姓名/姓/名）」に「-a/ya/i」などをつけるパターンが多くみられた。また、日本語の呼称語形としては、「名前（姓名/姓/名）」に「さん、ちゃん、くん」などをつける語形がみられた。今回の調査協力者の言語レベルを考慮すると韓国語の呼称語形が分からないとは考え難いことから、本調査で明らかになった相手言語規範から逸脱した日本語呼称の使用については、Kasper & Blumkulka (1993) の自分のアイデンティティを維持したいという学習者の語用論的スタイルの選択が影響しているとも考えられる。

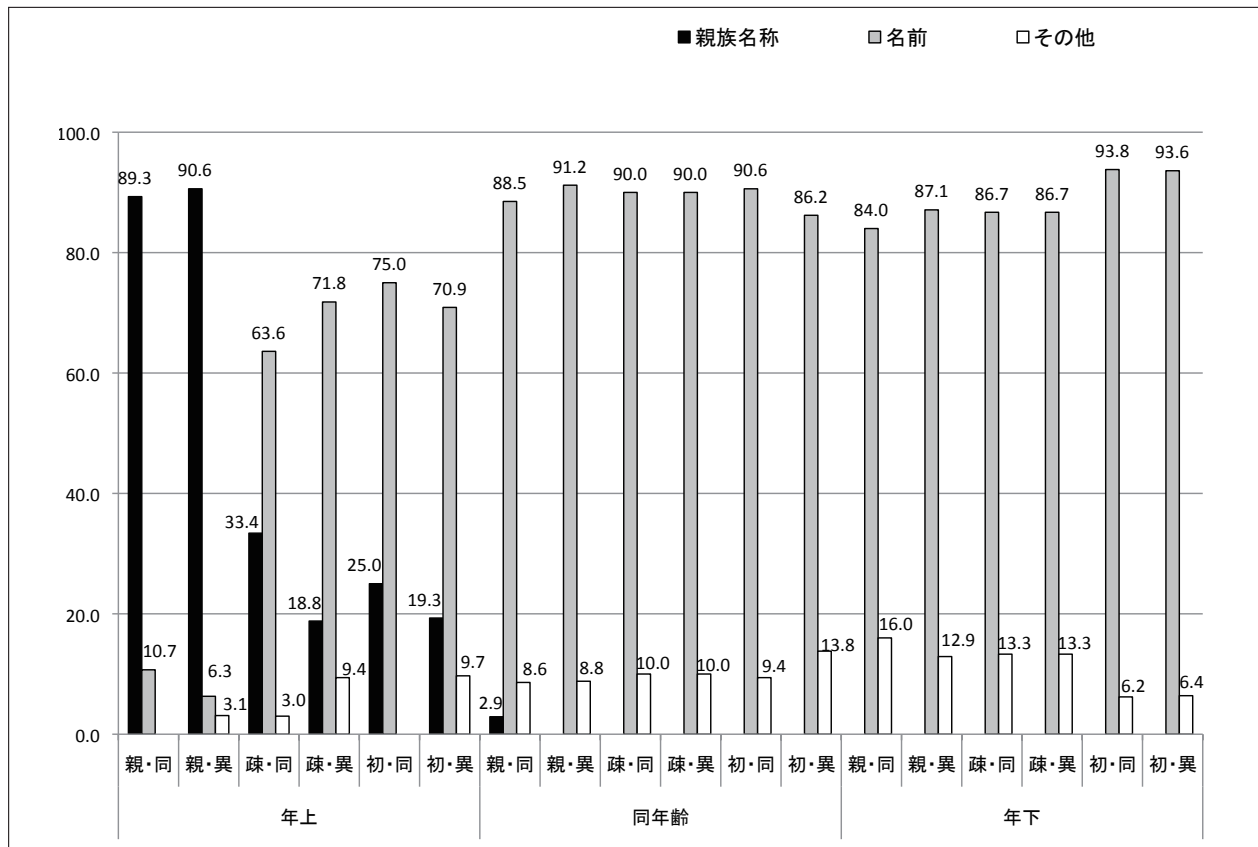


図1. 日本人韓国語学習者の韓国人に対する呼称使用の語形別出現頻度

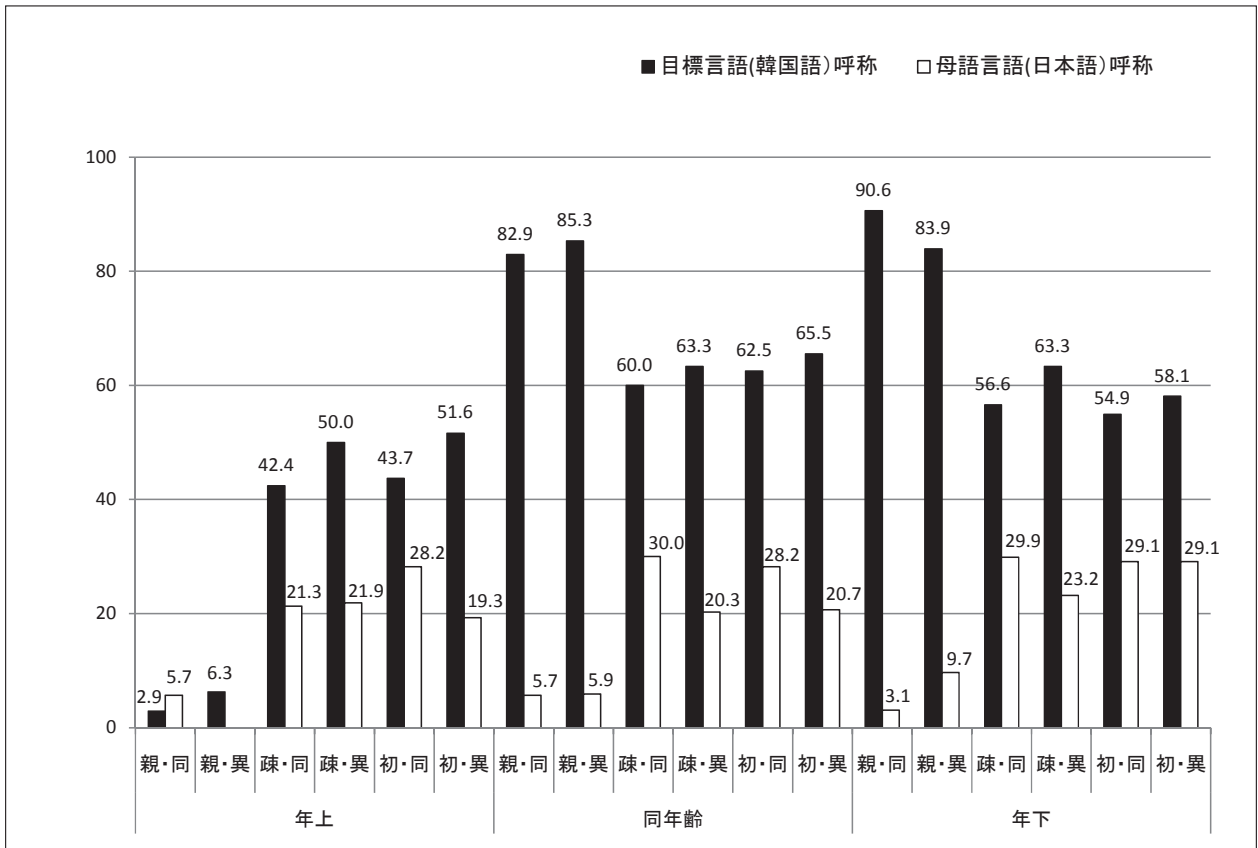


図2. 日本人韓国語学習者の名前使用に関する目標言語(韓国語)呼称と母語言語(日本語)呼称の出現頻度

注. 目標言語(韓国語)呼称とは相手の名前に「ssi/a/ya/i」などをつけて呼ぶもの、母語言語呼称とは相手の名前に「さん/ちゃん/くん」などをつけて呼ぶものを示す。なお、両言語でみられる「名前+呼び捨て」については目標言語(韓国語)呼称としてカウントした。

4. 「日本人韓国語学習者の呼称使用に対する韓国人母語話者の容認性判断」に関する調査概要

2014年10月から11月にかけて、山口県内の大学に在学中の韓国人留学生39名を対象に、日本人韓国語学習者の呼称使用の容認性判断に関する質問紙調査を行った。男女の内訳は男性が16名、女性が23名であった。平均年齢は21才2ヶ月(最年少が19才、最年長が28才)であった。

質問紙では、前述の日本人韓国語学習者の呼称使用戦略に関する実態調査で、その使用が確認できた呼称を取り上げ、日本人韓国語学習者の呼称使用戦略に関する韓国人母語話者の容認度を測定し、それを容認性判断の基準とした。日本人韓国語学習者の呼称使用戦略に関する容認性判断は【実際に使用されている表現であるけれど、この相手に向かって(あるいはこの場面で)用いるのは適切だ/不適切だ】という判断である。容認性判断は「とても適切である(容認度: +2)」から「全く適切でない(容認度: -2)」の5段階とし、容認度がマイナス

であれば否定的、プラスであれば肯定的であるという一般指標として用いた。

日本人韓国語学習者の呼称使用に対する韓国人母語話者の容認度の平均と標準偏差は表4、表5、表6に示した通りである。また、図3と図4は年上に対するそれぞれの呼称使用の容認性判断をグラフで示したものである。

まず、年上に対する「親族名称」と「先輩」に関する容認度をみると、表4と図3からも分かるように、「親族名称」の使用は全ての場面において肯定的に判断しているが、「先輩」に対する容認度は相手があまり親しくない異性の場合を除き、全体的に高くなく、親しい同性、あまり親しくない同性、初対面の異性に対しては否定的に受け止めていることが分かった。

母語話者間の「先輩」使用に関連して、ソウル地域の大学を対象にした皇甫(1993)の調査がある。それによると、年上の学校の先輩に対して「お兄さん・お姉さん」に当たる「hyeong/oppa・nuna/eonni」といった親族名称で呼びかけることが非常に多いが、日

本語の「先輩」に当たる「seonbae」と呼びかけることについては、親しい先輩に対してよりは親しくない先輩に対してより頻繁に使用される傾向がみられた。このような結果は、韓国語の「先輩」を意味する

「seonbae」が親族名称に比べて少し距離をおいた呼びかけであることを示唆している。このことが今回の日本人学習者の呼称使用の容認性判断においても影響しているものと考えられる。

表 4. 年上に対する呼称使用に関する韓国人母語話者の容認性判断の質問項目別平均と標準偏差

呼称	質問項目	M	SD
親族名称	年上の親しい同性の韓国人を「eonni/nuna/oppa/hyeong」と呼ぶ	.69	1.104
	年上の親しい異性の韓国人を「eonni/nuna/oppa/hyeong」と呼ぶ	.69	1.195
	年上のあまり親しくない同性の韓国人を「eonni/nuna/oppa/hyeong」と呼ぶ	.46	1.047
	年上のあまり親しくない異性の韓国人を「eonni/nuna/oppa/hyeong」と呼ぶ	.26	1.117
	初対面の年上の同性の韓国人を「eonni/nuna/oppa/hyeong」と呼ぶ	.23	1.180
	初対面の年上の異性の韓国人を「eonni/nuna/oppa/hyeong」と呼ぶ	.31	.977
先輩	年上の親しい同性の韓国人を「先輩」と呼ぶ	-.05	1.251
	年上の親しい異性の韓国人を「先輩」と呼ぶ	.00	1.000
	年上のあまり親しくない同性の韓国人を「先輩」と呼ぶ	-.10	1.046
	年上のあまり親しくない異性の韓国人を「先輩」と呼ぶ	.03	1.078
	初対面の年上の同性の韓国人を「先輩」と呼ぶ	.03	1.038
	初対面の年上の異性の韓国人を「先輩」と呼ぶ	-.13	1.070
名前+ssi	年上の親しい同性の韓国人を「名前+ssi」と呼ぶ	-.49	1.073
	年上の親しい異性の韓国人を「名前+ssi」と呼ぶ	-.21	1.056
	年上のあまり親しくない同性の韓国人を「名前+ssi」と呼ぶ	.05	1.169
	年上のあまり親しくない異性の韓国人を「名前+ssi」と呼ぶ	.05	1.123
	初対面の年上の同性の韓国人を「名前+ssi」と呼ぶ	.18	1.036
	初対面の年上の異性の韓国人を「名前+ssi」と呼ぶ	.20	1.159
名前+さん	年上の親しい同性の韓国人を「名前+さん」と呼ぶ	-.31	1.104
	年上の親しい異性の韓国人を「名前+さん」と呼ぶ	-.33	1.060
	年上のあまり親しくない同性の韓国人を「名前+さん」と呼ぶ	.08	1.201
	年上のあまり親しくない異性の韓国人を「名前+さん」と呼ぶ	-.03	1.158
	初対面の年上の同性の韓国人を「名前+さん」と呼ぶ	.03	1.112
	初対面の年上の異性の韓国人を「名前+さん」と呼ぶ	-.10	1.095

注：数値は、2 から -2 までの変数である。網掛けした部分は呼称使用に関してマイナス指標を示す。

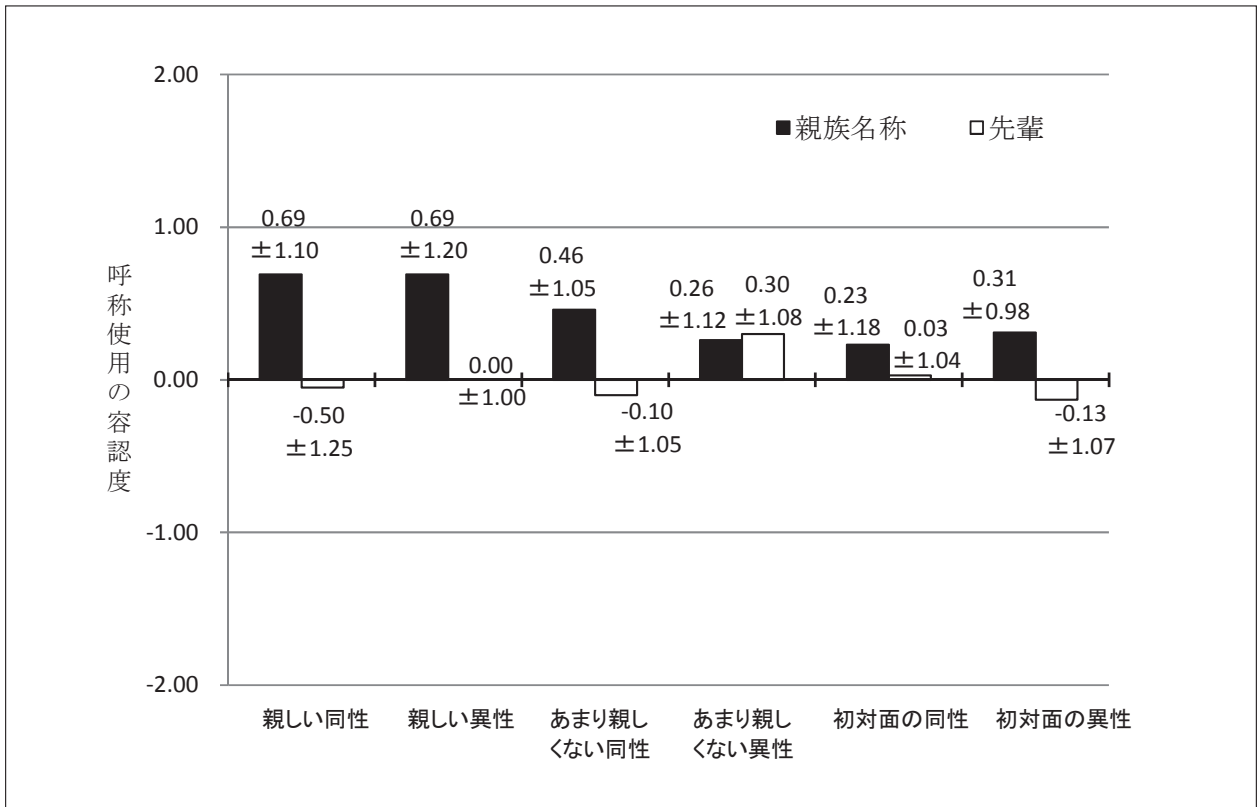


図3. 韓国人年上に対する「親族名称」と「先輩」使用に対する容認度

注. 棒グラフは容認度の平均、標準偏差(±)を示す。

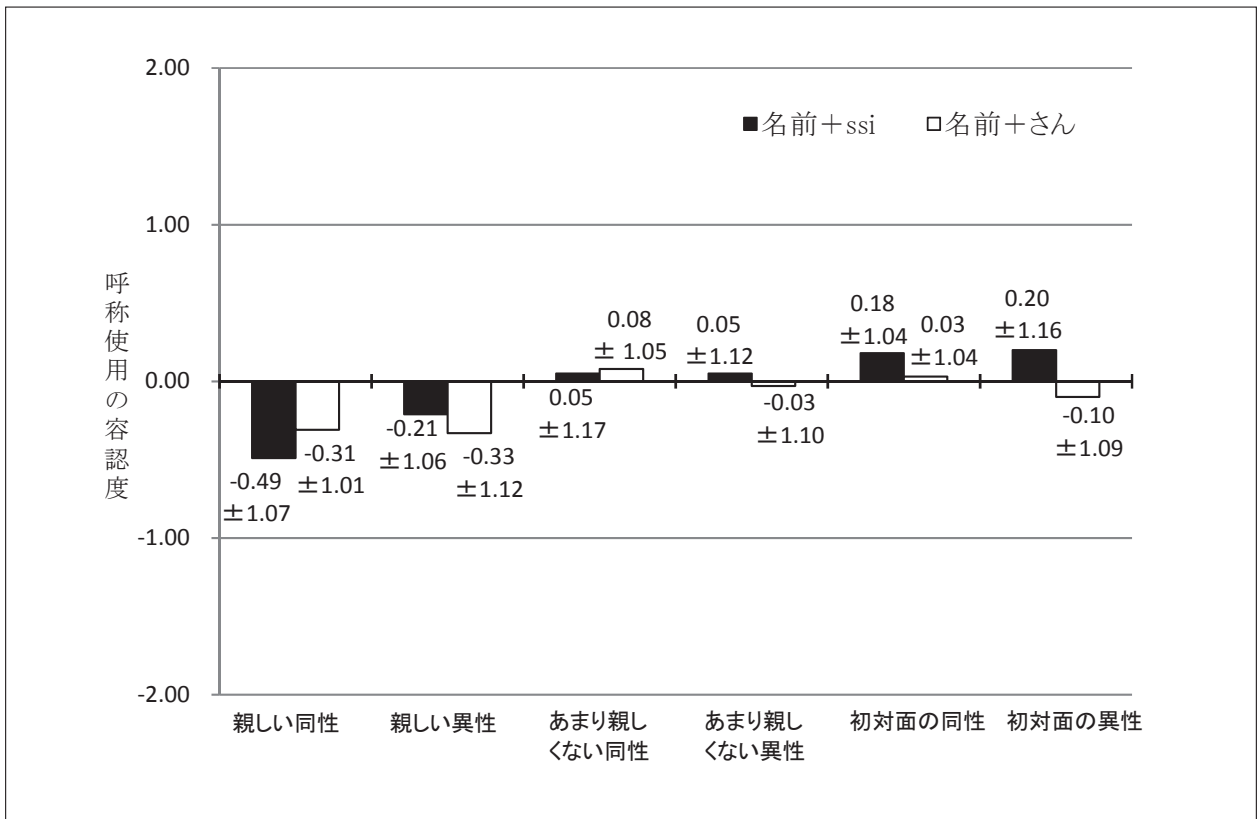


図4. 韓国人年上に対する「名前+ssi」と「名前+さん」の容認度

注. 棒グラフは容認度の平均、標準偏差(±)を示す。

表5. 同年齢に対する呼称使用に関する韓国人母語話者の容認性判断の質問項目別平均と標準偏差

呼称	質問項目	M	SD
名前+a/ya	同年齢の親しい同性の韓国人を「名前+a/ya」と呼ぶ	1.10	1.231
	同年齢の親しい異性の韓国人を「名前+a/ya」と呼ぶ	.89	1.203
	同年齢のあまり親しくない同性の韓国人を「名前+a/ya」と呼ぶ	-.10	1.231
	同年齢のあまり親しくない異性の韓国人を「名前+a/ya」と呼ぶ	.05	.857
	初対面の同年齢の同性の韓国人を「名前+a/ya」と呼ぶ	.08	1.061
	初対面の同年齢の異性の韓国人を「名前+a/ya」と呼ぶ	-.23	1.135
名前+ssi	同年齢の親しい同性の韓国人を「名前+ssi」と呼ぶ	-.36	1.038
	同年齢の親しい異性の韓国人を「名前+ssi」と呼ぶ	-.36	1.038
	同年齢のあまり親しくない同性の韓国人を「名前+ssi」と呼ぶ	-.28	1.099
	同年齢のあまり親しくない異性の韓国人を「名前+ssi」と呼ぶ	-.10	.912
	初対面の同年齢の同性の韓国人を「名前+ssi」と呼ぶ	-.10	1.071
	初対面の同年齢の異性の韓国人を「名前+ssi」と呼ぶ	.23	1.180
名前+さん	同年齢の親しい同性の韓国人を「名前+さん」と呼ぶ	-.46	1.047
	同年齢の親しい異性の韓国人を「名前+さん」と呼ぶ	-.44	1.046
	同年齢のあまり親しくない同性の韓国人を「名前+さん」と呼ぶ	-.21	1.056
	同年齢のあまり親しくない異性の韓国人を「名前+さん」と呼ぶ	-.05	1.064
	初対面の同年齢の同性の韓国人を「名前+さん」と呼ぶ	.00	1.170
	初対面の同年齢の異性の韓国人を「名前+さん」と呼ぶ	-.23	1.307
名前+くん	同年齢の親しい韓国人男性を「名前+くん」と呼ぶ	-.46	1.097
	同年齢のあまり親しくない韓国人男性を「名前+くん」と呼ぶ	-.38	1.016
名前+ちゃん	同年齢の親しい韓国人を「名前+ちゃん」と呼ぶ	-.51	.942
	同年齢のあまり親しくない韓国人を「名前+ちゃん」と呼ぶ	.03	1.135

注：数値は、2から-2までの変数である。網掛けした部分は呼称使用に関してマイナス指標を示す。

表6. 年下に対する呼称使用に関する韓国人母語話者の容認性判断の質問項目別平均と標準偏差

呼称	質問項目	M	SD
名前+a/ya	年下の親しい同性の韓国人を「名前+a/ya」と呼ぶ	.59	1.093
	年下の親しい異性の韓国人を「名前+a/ya」と呼ぶ	1.08	.870
	年下のあまり親しくない同性の韓国人を「名前+a/ya」と呼ぶ	.44	1.142
	年下のあまり親しくない異性の韓国人を「名前+a/ya」と呼ぶ	.26	1.186
	初対面の年下の同性の韓国人を「名前+a/ya」と呼ぶ	.08	1.201
	初対面の年下の異性の韓国人を「名前+a/ya」と呼ぶ	-.13	1.260
名前+ssi	年下の親しい同性の韓国人を「名前+ssi」と呼ぶ	-.74	.910
	年下の親しい異性の韓国人を「名前+ssi」と呼ぶ	-.62	.963
	年下のあまり親しくない同性の韓国人を「名前+ssi」と呼ぶ	-.26	1.044
	年下のあまり親しくない異性の韓国人を「名前+ssi」と呼ぶ	-.18	.942
	初対面の年下の同性の韓国人を「名前+ssi」と呼ぶ	-.03	1.088
	初対面の年下の異性の韓国人を「名前+ssi」と呼ぶ	-.05	1.099
名前+さん	年下の親しい同性の韓国人を「名前+さん」と呼ぶ	-.56	.968
	年下の親しい異性の韓国人を「名前+さん」と呼ぶ	-.47	1.006
	年下のあまり親しくない同性の韓国人を「名前+さん」と呼ぶ	-.23	.959
	年下のあまり親しくない異性の韓国人を「名前+さん」と呼ぶ	-.23	1.111
	初対面の年下の同性の韓国人を「名前+さん」と呼ぶ	-.18	1.073
	初対面の年下の異性の韓国人を「名前+さん」と呼ぶ	.08	.984
名前+くん	年下の親しい韓国人男性を「名前+くん」と呼ぶ	-.26	1.163
	年下のあまり親しくない韓国人男性を「名前+くん」と呼ぶ	-.33	1.034
名前+ちゃん	年下の親しい韓国人を「名前+ちゃん」と呼ぶ	-.23	1.135
	年下のあまり親しくない韓国人を「名前+ちゃん」と呼ぶ	-.33	.982

注：数値は、2から-2までの変数である。網掛けした部分は呼称使用に関してマイナス指標を示す。

一方、年上に対する名前使用の容認度（図4）は、親しい相手に対しては、「名前+ssi」、「名前+さん」とも否定的に受け止めている。これは母語規範の影響、つまり韓国語では親しい年上に対しては名前ではなく親族名称で呼びかけることが多いことが影響していると推測できる。しかし、あまり親しくない相手や初対面の相手を「名前+ssi」で呼ぶことに対しては肯定的に判断しており、その容認度は初対面の相手より高かった。これに対し、日本語呼称である「名前+さん」の容認度は全体的に高くなく、初対面に対してはより否定的に受け止められていることが分かった。

同年齢に対する日本人韓国語学習者の呼称使用に対する容認度の結果をみると（表5）、韓国語呼称では「名前+ssi」は初対面の異性を除けば、すべての場合において否定的に受け止めていることが分かった。これに対し「名前+a/ya」はあまり親しくない異性と初対面の異性に対するは否定的であったものの、その他は肯定的な判断であった。韓国語の「ssi」は日本語の「さん」に当たる敬称であるが、大学生同士ではあまり用いられないことがその原因であると推測される。一方、日本語呼称使用に関しては、あまり親しくない同年齢を「名前+ちゃん」と呼ぶ場面を除いては否定的に受け止める傾向が強かった。

年下に対する日本人韓国語学習者の呼称使用に対する容認度（表6）は、場面によって容認度の差はあるものの、「名前+a/ya」は初対面の異性を除くすべての場面で肯定的に判断しているのに対し、「名前+ssi」は同年齢に対する場合と同様にすべての場面で否定的に受け止めている。また、日本語呼称使用に対しては初対面の異性に対する「名前+さん」のみ肯定的で、その他の場面に対してはすべて否定的に受け止めていることが明らかになった。

以上のことから、韓国語の呼称「名前+ssi」は親しい年上や同年齢、年下に対しては用にくいこと、また日本語呼称は相手との間柄によって多少の差はあるとしても、韓国人母語話者には全体的に否定的に受け止められていることから韓国人との接触場面では好まれない呼称であることが示唆された。

5. まとめと今後の課題

本研究では、接触場面での日本人韓国語学習者による呼称使用ストラテジーの実態を調査し、その使用を韓国人母語話者がどのように受け止めているかを容認性判断から検討した。その結果は、以下の3つに要約

できよう。

第1に、日本人韓国語学習者の呼称使用の実態調査では、目標言語（韓国語）呼称と母語言語（日本語）呼称の使用が混在するなどといった母語規範の転移や相手言語規範の逸脱だけではなく、学習者が親しい相手に対しては「親族名称」を多用するなど、相手に心配りを示す特定の呼称を使用するケースが見られた。これらは目標言語の語用論的知識の欠落というよりも、Kasper & Blumkulka (1993) が指摘している学習者の語用論的スタイルの選択が強いかかわっているものと解釈できる。

第2に、日本人韓国語学習者による呼称使用ストラテジーにおける母語規範の転移や相手言語規範使用と逸脱における韓国人母語話者の容認性判断では、全体的に母語規範と照らし合わせて適切かどうかを判断する傾向が強いことが明らかになった。第二言語学習者が母語の全般的なポライトネスの優先傾向を第二言語の言語使用に転移する（清水, 2009）ことが分かっているが、本調査の結果は学習者の言語使用に対する母語話者の容認性判断に判定者の母語言語規範が優先されていることを示唆している。

第3に、日本人韓国語学習者の親族名称使用と名前使用の容認性判断からも分かるように、学習者の相手言語規範転移について韓国人母語話者は全体的に寛容的に判断する。しかし、学習者が母語言語による呼称を用いることつまり母語転移に対してはおおむね否定的に受け止める傾向が強い。

本稿では、接触場面での日本人母語話者の呼称使用ストラテジーとそれに対する韓国人母語話者の容認性判断を中心に考察を行い、接触場面での言語コードやコミュニケーション規範を検討してみることができた。しかし、参加者の意識や呼称の語用論的転移と目標言語習熟度との関係については新たに検討する必要がある。また、ファン (2006) では、接触言語による接触場面の分類を提起し、相手言語接触場面（参加者のどちらかが相手の言語を用いてコミュニケーションを行う場面）と、第三者言語接触場面（参加者の双方が自分の言語ではなく第三者の言語を使用する NNS 同士のコミュニケーション場面）では、それぞれコミュニケーションへの参加方法が異なることが指摘されている。そのため、接触場面の場面性が呼称選択にどのように関わっているかについても更なる検討が必要であろう。これらについては今後の課題としたい。

引用文献

- 1) 林炫情 (2001a) 「韓国語と日本語における呼称の対照研究序論」『国際協力研究誌』7 (1). 107-121.
- 2) 林炫情 (2001b) 「韓国語と日本語の呼称に関する社会言語学的研究－親族間の上下による使い分けの現状を中心に」『日本学報』48. 61-76.
- 3) 林炫情 (2002) 「自称詞使用に関する日韓対照研究－アンケート調査に基づいて」『ニダバ』31. 51-61.
- 4) 林炫情・玉岡賀津雄・深見兼孝 (2002) 「日本語と韓国語における呼称選択の適切性」『日本語科学』11. 31-54.
- 5) 林炫情 (2003) 「非親族への呼称使用に関する日韓対照研究」『社会言語科学』5 (2). 20-32.
- 6) 林炫情・玉岡賀津雄 (2003) 「職場における「お兄さん」および「お姉さん」の親族名称使用に関する日韓対照研究」『日本文化学報』18. 21-35.
- 7) 林炫情・深見兼孝 (2004) 「他称詞と述語にみられる待遇法に関する日韓対照研究」『国際協力研究誌』10 (2). 13-27.
- 8) 林炫情・玉岡賀津雄 (2004) 「韓国の職場での呼称使用の適切性判断に及ぼす属性・対人関係特性・性格特性の影響」『広島経済大学研究論集』27 (1). 29-44.
- 9) 林炫情 (2005) 「非親族への聞き手待遇に関する日韓対照研究」『ニダバ』34. 145-154.
- 10) 林炫情 (2006) 「代名詞的用法の対称詞使用に関する日韓対照研究」『人間環境学研究』5 (1). 1-19.
- 11) 林炫情・玉岡賀津雄 (2009) 「韓国人大学生の先輩に対する「親族名称」と「実名」の使用に関する適切度を定める諸要因」『ことばの科学』22. 137-149.
- 12) 林炫情・玉岡賀津雄・宮岡弥生・金秀眞 (2010) 「丁寧度判定で測定したポライトネス・ストラテジーの要因に関する決定木分析」『日本文化学報』47. 101-115.
- 13) 林炫情・玉岡賀津雄 (2013) 「呼称使用の容認度判断と情動知能 (Emotional Intelligence: EI) の関係」『ことばの科学』26. 25-38.
- 14) 薄井宏美 (2007) 「接触場面の参加者の役割から見る社会文化能力の習得－インターアクション場面のケーススタディから」『千葉大学日本文化論叢』8, 76 (31)-59 (48).
- 15) 清水崇文 (2009) 『中間言語語用論概論：第二言語学習者の語用論的能力の使用・習得・教育』スリーエーネットワーク
- 16) 田崎敦子 (2007) 「接触場面のコードスイッチングが 参与者に与える影響－多言語を背景にした大学院生のグループ ディスカッションを対象に一」『異文化コミュニケーション研究』19. 85-99.
- 17) フェアフラザー, リサ (2002) 「相手言語接触場面における日本語母語話者の規範適用メカニズム」『千葉大学大学院社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書』38, 1-12.
- 18) ファン, サウクエン (2006) 「接触場面のタイポロジーと接触場面研究の課題」国立国語研究所編『日本語教育の新たな文脈』国立国語研究所編、120-141. 東京：アルク出版
- 19) 皇甫奈映 (1993) 「現代韓国語呼称の社会言語学的研究：ソウル地域大学生社会の用法を中心に」修士論文. ソウル大学 (韓国語)
- 20) Faerch, C. & Kasper, G. (1983). "Plans and strategies in foreign language communication". In Fraech, C. & Kasper, G.. *Strategies in Interlanguage Communication*. Longman. 20-60
- 21) Kasper, G., & Blum Kulka, S. (1993). "Interlanguage pragmatics: Introduction". In G. Kasper & Blum-Kulka (Eds.), *Interlanguage pragmatics* (pp.3-7). New York: Oxford University Press.
- 22) Tamaoka, K., Lim, H.J., Miyaoka, Y. & Kiyama, S. (2010). Effects of gender-identity and gender-congruence on levels of politeness among young Japanese and Koreans. *Journal of Asian Pacific Communication*, 20. 23-45

謝辞

本研究は、「JSPS科研費24520638」の助成を受けたものです。

林 炫情 (いむ ひょんじょん)
山口県立大学大学院国際文化学研究科教授